

□ 修学旅行

昭和63年10月4日、修学旅行の第3日目の宿泊地湯湧温泉で、僕と■は同じ部屋に泊っていた。そしてこの時はじめて、■と二人だけで会話をしたときだと思ふ。もちろん、それ以前にも■と会話をしたわけではないが、その時の会話はそれ以前の「会話」とは内容、量ともに異なる本当の会話であったような気がします。修学旅行の前の9日には文化祭があった。そのとき、ふとしたことで、以前ならなれないなと思っていた女の子のことが、忘れられなくなってしまうのである。つまり一般的に言えば、好きになっただけなのである。修学旅行という、そのことを考えていて、頭の中が、ぼー、としたような気がする。まあ、この理由だけでなく夜中じょう起きだったので、寝たばかりというところも考えられる。それだから、僕は修学旅行中のことが、あまり記憶に残っていない。四日目のレク大会のことが憶えてはいるが、高山や金沢で何をしていたか、あまり良く憶えていない。そうし中で、修学旅行中で得たもののひとつとして、■と友達になったことがあげられる。以前にも友達と女の子のことをさぐりさせたことはあるが、僕はこのときまで、その娘への好きがあるというのを、正式には、だれにも話したことがなかった。3日目の宿泊地で、僕と■は同じ部屋の中で、しかも偶然、前後に、つまり、頭と、頭が、向きあうような感じで、ふと人をひいてした。まあ、そんなことで、互いに近くにいたので、なんとなくお互いに夜中話していた。僕は今まで、(小、中学生のときと女)女の子のことを好きになっても、何だか、はずかしいという気持ちがある。そんな友達にも、そのようなことを話したことはなかった。僕は、最初、2-6になったとき、■のことをあまりよくわからず、やつたな〜と思っていた。つまり、それ以前の■に対する印象は、あまり、いいものではなかったが、しかし、そのように、会話しているときの、僕の■に対する印象は、いいものだった。しばらく話して、話の内容が、女の子の話になり、(話の内容は、ほとんど女の子のこと)、■の話術にはまたのか、気があったのかは、わからなければ、ただ、そのことを、■に話していた。そして■は、けっこう話にのってきて、いろいろ話した。まあ、二人の間に、僕と■は、出会い、友達になったわけだ。